

# 現代美術作品の制作による人体表現の可能性について

丸山 喬平

服飾芸術科

## 1. はじめに

作品の意図や製作過程をタイトル以外の形で言語化するという事について、作者でありながら自らの作品について作家が語った言葉が必ずしも真実を語っているとは限らず、作家が作品についてまとめた一文があったとして、それが作品のあり様を絶対的に決める事は無い。作品は最終的に作家の手を離れ独立した存在となり、作品に秘められた意味は鑑賞者が作品に対してなげかけを行ったとき初めて生まれるものだと考えている。(仮にその意味が作家の意図と大きく異なる物であったとしても) 言葉のつながりや作る意味についての考えを、色、形の造形へ繋げる事は多大な労力も費やす。しかしそれはおしよせる情報の波風に抗う為に費やされるべき労力であり、思考は、創造性を拓け、加速させる為のルールとなるはずである。そして私が作品に対し込めた意味もまた、矛盾もひっくり返してその作品を形作っているものであるとその意図について言語化を試みたいと思う。

人体を制作のモチーフに選んでいるのは日常的に接するものの形の中で非常に多様な表情を持つ物の一つであり、人の思想と自然界の基本構造とをつなぎ合わせ、芸術についての研究を行う上で最も適したモチーフであると考えからである。なにより強いのは、人の佇まい、存在感について、感動と疑問が尽きないからである。

今作品のテーマは解剖学的視点において人体についての考察を深めることと、芸術作品として鑑賞者に、日常を日常と異なる視点から見ることにより新たな価値観を見出すに至らせるものを現すことである。

人体骨格をモチーフとして扱っているが、何であれ物の本質を捉えることが肝心であり、ドクロとも

呼ばれる表面的なキャラクター性のみをなぞることに終わってはならない。人の成り立ち、動きを通じ思考を見ることは長い目で見たとき文化を追求することにつながると考えている。

学生時代より続けてきた、人体の制作研究の一環として今年度は人体骨格の縮小版を制作し「運動についての思考」(fig. 5) という作品として日本橋三越にて行われた「三越×芸大 夏の芸術祭」にて作品展示を行った。その製作過程を交え自作についての考察を行い、研究年報としたい。

## 2. 芸術における骨格の扱いについて

### ・偶像、表現のための骨格

古今東西、人体の骨格(骸骨)は様々な作品の中で取り上げられているモチーフである。しかし同じモチーフでも作品の中での扱いには意図に応じ変化に富んでいる。これまで人体骨格というモチーフがどのような表現の中に用いられてきたかを見、私の作品はどのようなスタンスでこのモチーフと関わろうとしているのか考えたい。



fig. 1 リジェ・リシエ「トランジ」

中世の彫刻の中には、画家が貴族の肖像画を描くように、彫刻家が墓のために朽ち行く肉体を彫刻にしたものもある。高度な技法で作成された彫刻はそれのみでも高い芸術的価値があるが、おどろおどろしくもある「死体」を、死を慈しむ場である墓に添えるのは、西洋の「メント・モリ」の思想によるものである。必ず訪れる「死」を思うことにより現世における「生」をより意義あるものにするべきだという思想のために、テーマにふさわしい存在感の追求が行われている。ルネサンスに近くなると自然観察の重要性が増し、写実的描写に優れた作品が多く現れるようになる。トランジにおける表現はあくまで信仰、思想から生じたものであり、動く屍により現されているものは「死」の象徴性なのである。

一方で芸術家が人体のリアリティの追求のために作成した人体解剖模型のような作品もある。レオナルドはイタリア語にて「エコルシェ」(皮をはぐ)と呼ばれることが多いが、これは生きた人間の内部にてどのような筋肉の運動が起こっているか、「生」を観るためのものであり、トランジに観られる表現とは似て非なるものである。事実として人体は骨、内臓、筋肉、皮膚全てが連動し始めて運動をすることが出来るので、写実を追及する上であくまで解剖模型、解剖図による把握は観察の一助に過ぎないことを踏まえていなければならないが、ウードンをはじめとする、高い観察眼を持った彫刻家のエコルシェは、人間の有様について深く訴えかける作品といえる。マルセルデュシャンなどに代表されるコンセプチュアル・アートやレディメイドの概念が生まれるまで、骨格というモチーフは上記したような、「死」をはじめとした負のイメージの象徴化や、人体のリアリティを追求するうえで、構造把握の一助として把握すべき要素として存在していた。しかし現代において、医学の発展に伴い、社会の中での人の形のあり方や死についての考え方が多様化し、芸術における骨格というモチーフの有様もまた多様化してきている。

レオナルド・ダ・ヴィンチの手稿に記されている人体解剖のスケッチが同時代の作家たちの行っていたそれより優れている点の一つに、主観性を排除した観察による描写の正確性がある。人体解剖図譜の

古典として、ヴェザリウスの残したファブリカがあるが、この図の優れたところもやはり主観性を排除した観察に基づく描写の制度にある。それ以前の医学書に記されている解剖図譜は骨、筋、内蔵などの配置を詳細に記さなければその意味を成さないが、それぞれの図の形の質感や特徴の程度を描写することに重点を置いていない。また、医学の中に迷信や観念的な考えが強い影響を与えている中では、観察による形の精度は下がり、それはそれである種その時代ならではの趣はあるが自然の中における人体の美しさを見出しているものではない。物の中から存在感や美しさを見出すことは芸術家の仕事の一つであり、実際西洋の中でリアリズムが発展していく中で芸術家に解剖図譜作成の依頼が来ることは多々あった。芸術についての考え方の中で個性、独創性を強く求める面があるのは確かだがいかなる表現も、目の前にある存在から価値を見出すことから始まり、その基礎となるのは存在と真正面から向き合うための観察眼である。今回の私の作品の中でも、客観性を持ち、人体の構造から新たな価値観を得ようという意図があった。



fig. 2 ウードン「エコルシェ」

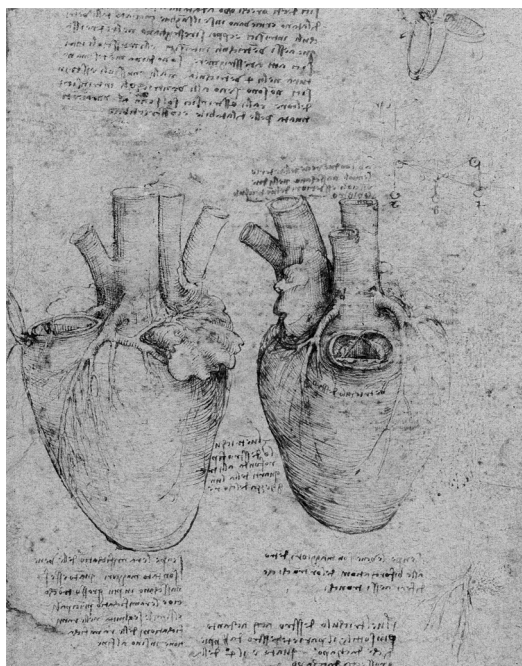


fig. 3 レオナルド・ダ・ヴィンチ  
(手稿より抜粋)

・人体の運動の表現について

人の形の本質とはなんだろうかという問いが、私のテーマの一つである。写実表現を通じ、人体の一つ一つの形の機能、意味、理由について考え、道理に即した人体の形を追求している。生きた人間の存在感に迫るといふところ以外の目標が、私の中で言語化に至っておらずその時々で適当な言語で補っていきたいが、今回の制作の中で、人の形を通じ理解したいと考えていたテーマの一つは歩行ないし走行による前進運動に適した形とは何かという面である。

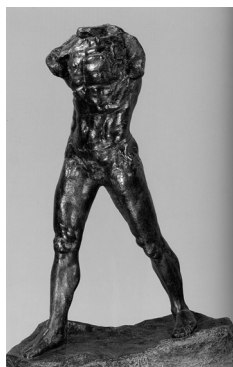


fig. 4 ロダン「歩く人」

歩行という運動についても過去様々な作家が取り組んでおり、どの作品でも時間経過の表現を大きな課題として取り組んでいる。ロダンの「歩く人」では表面的な描写を嫌い、地面をける左足を踵までつけ、腿までの比率を伸ばして量の動きなどを生かし運動の勢いを静止した塊の中に封じこめようとしたり、絵画では多くの作家が連続静止写真による動きの分解と再構築を試みている中で、ボッチョーニの「空間の中に連続する単一の形体」では、キュビズムのような多視点的形態の把握や再構築により、エネルギーの流れそのものともいえるような形体の表現に到達している。今作品の中で、5つの人体骨格により前進をテーマとする一つの場面を作ることで、人という種類の形がその役毎にどのように動作を変容し、そこにどのような空間と感情の流れが生まれるのかが見ることが出来るものを目指した。骨格を制作する中で、人の形は最小限の筋力の消費で重心移動をすることに如何に優れているかが実感できたのは大きな収穫の一つである。肉体の移動という行為を少ない労力で行うことが出来るのは直立二足歩行が出来る人間のみで、それにより環境の変化に即し住まいを移動することが容易であったり、獲物を忍耐強く追うことも可能であったり、目的を達成する能力に長けていったという。歴史的な事実や形状の特徴から、歩行という一つの動作により、人間の追求心を表現することが可能であるという考えに至った。固体ではなく集団により意思を供することによるエネルギーの増大を表したいとも感じ、複数対の人体（骨格）を一つの場面に配置することとした。制作する中で、表情やモデルの個性、体格の違いにより個性の表現を図ることが多い。多くの表情は皮膚や筋肉の動きにより表現されることが多く、様々な情報を与えてくれるが、同時に骨格的な意識が追いつかず表面的な描写に陥ることも少なくない。今回の作品では体の動きのみによる人間の表情の表現を試みている。顔の表情による表面的な怒りや悲しみではなく、四肢を含めた空間の表情の変化を起こせるかどうかの試みである。

40平方センチという限られた面積の中で、歩を進める人々と、それに反し不安そうに身をかがめ、その不安を受け止めるように腰を据える人間を

いる。この場面が現すのは、人間の欲求の増殖や理性の発展に対する賛同や興奮の意味と、不透明感、不安感の意味がある。またいくつかの方向性の異なる動きを正方形の中に配置することで、始点の流れが一箇所に止まることなく流れ続けるようにもしている。

### 3. 制作方法について

今回は主にレジンキャストの手法を用いて制作を行った。使用した素材は原型製作にグレイスカルピーとポリパテ、下地塗りに用塗料（サーフェイサー）、頭蓋骨、下顎骨、鎖骨、肋骨、肩甲骨、上腕骨、尺骨、橈骨、大腿骨足、脛骨、腓骨、頸椎から胸椎、腰椎、骨盤まで、手根骨から中指骨、指骨まで、足根骨から、中即骨、基設骨までとをひとまとめにし、全24部分に分け制作した。いくらかのパーツごとに分けシリコンにて型を制作し、レジンキャスト（ウレタン樹脂）にて脱型し、真鍮線などにより部品をつなぎ合わせていった。

シリコンにて型の製作を行ったのはいくつかの理由によるものであるが、一つは複数体の製作を予定していたからであり、今回まとめている運動についての思考は三越の展示用に五体にて構成を行ったが、最終的には100体前後、他の動物の骨格とともに群体として構成する予定である。

もう一つはパーツを真鍮線で接続する際、スカルピーのままだと強度が足りず、真鍮線を差した所から負荷がかかった際破損してしまう可能性があるからである。スカルピーにて原型を作り、シリコンにて型を取り、ウレタン樹脂にて起こすというプロセスは一般的にフィギュア制作の際広く用いられる方法であり、商業のための複製の生産を目的に生まれた技法であり、ある種唯物性を尊重する芸術作品においては価値の希薄化につながり不向きと考えられる面もあるかもしれないがその価値の希薄化も含め、現代の物質的人体感覚の希薄化に警鐘を促す意味合いもある。

### 4. おわりに

この作品を制作することにより、観察力の向上という意味で人体の内部空間も含めた形を多面的にイ

メージする意識を強めることが出来たと感じている。表現という意味ではまだ視覚的表層の描写に止まる部分があるので、私を取り囲む環境や自身と向き合った上で、より表現によるエネルギーの解放を目指したい。造形技術を発展させていき、更なる造形表現の可能性を広げるだけでなく、作品の発表を通じ人間の有様のリアリティについての投げかけを行っていききたい。

最後に、この度日本橋三越にて貴重な展示の機会を与えてくださった東京藝術大学准教授原真一先生、日本橋三越美術商品部担当下村様、ほか展示にかかわっていたスタッフの皆様にご心より御礼申し上げます。



「運動についての思考」2016作  
アクリル板、木、ウレタン樹脂  
400×400×400mm

### 参考文献

- fig.1 「死と墓のイコノロジー」 Kathleen Cohen 図版116 1994 平凡社
- fig.2 「世界の美術」 Andrew Graham-Dixon p248 2009 河出書房新社
- fig.3 「西洋絵画の巨匠 8 レオナルド・ダ・ヴィンチ」 池上英洋 p111 2007 小学館
- fig.4 「西洋美術大全集第23巻」 池上忠治 p274

1993 小学館

- 「人体600万年史・科学が明かす進化、健康、疾病（上・下）」

Daniel E. Lieberman 2015 早川書房

- 「人体解剖図 人体の謎を探る500年史」

Rifkin Benjamin A, Ackerman Michael J, Folkenberg Judith 2007 二見書房

- 「死の帝国」 Paul Koudounaris 2013 創元社

- 「サピエンス全史（上）文明の構造と人類の幸福」

Yuval Noah Harari 2016 河出書房新社

- 「解剖学カラーアトラス 第7版」

J.W.Rohen, 横地千仞, E.Lutjen-Drecoll 2012  
医学書院

